

文学博士興膳 宏氏の「中国文学理論の 研究」に対する授賞審査要旨

授賞の対象とするのは、興膳 宏氏（以下、著者と称する）の『中国の文学理論』（筑摩書房一九八八年九月旧版、清文堂出版二〇〇八年一月新版）、及び『中国文学理論の展開』（清文堂出版二〇〇八年三月）の二著であるが、主として後者を中心に論定する。

著者は、二著を通じて、いずれも南朝の梁代に現われた劉勰『文心雕龍』、昭明太子『文選』、鍾嶸『詩品』の三つの作品を軸として、六朝から唐宋に及ぶ文学批評の変遷を系統的に論述する。

まず第一に、『文心雕龍』について、先行著作との影響関係を論じ、陸機の『文賦』、挚虞の『文章流別論』、沈約の『宋書』「謝靈運伝論」などの影響を指摘する。また、その思维構造について、文章創作論、自然観照論の二つの分野にわたり分析し、文章創作の要諦として、常に文章の淵源としての儒教經典に回帰すべきことを主張し、また自然観照においても、憂鬱を山水に託すというよりは、本源的な自然に回帰することを理想としているとし、この本源回帰という思维形式の中には、儒教だけでなく老荘思想や仏教の思想が潜

んでいるとする。さらに『文心雕龍』の文章には、同じ劉勰が加筆に関与した『出三藏記集』の文章と表現や用語法の上で類似する箇所が少なからず認められることを根拠として、劉勰がその発想の根底において、仏教の影響を強く受け、その行論の精緻な整合性は、儒学よりもより体系的な仏教学の発想に由来すると判じている。次いで著者は、『文心雕龍』が後世の文学評論に及ぼした影響について、人体と関係づけて情志、事義、辞采、宮商をあげる『文心雕龍』の発想が北齊・顔之推『顔氏家訓』に、また「心と物の交融」に於いての『文心雕龍』「物色篇」の議論が、唐・王昌齡『詩格』に影響していることを指摘する。これらの分析は、その深い考察において、先人をしのぐものがある。

第二に、『文選』について、この書が作者昭明太子の政治的位置に関連して、成立当初、しばらく流伝せず、隋唐に入ってはじめて世に行われるようになった点について、諸説を批判しながら、独自の周到な推理を展開している。

第三に、鍾嶸『詩品』について、唐宋以後の文学理論史（詩評）は、『文心雕龍』よりは、むしろ鍾嶸『詩品』を起点として展開した経緯を詳論する。つまり梁・鍾嶸『詩品』は、『文心雕龍』の経書を理想とする古典正統主義に反発し、文学批評において、劉勰とは逆に奇抜な表現、気の充実、文学としての個性や獨創性を重視したものと

位置づけて、次の点を指摘する。

1. 『詩品』は、調和よりも奇を愛し、奇句、秀句を核としつつ詩評を展開し、時には詩作をめぐる瑣事を詩評の中に挿入することによって、詩人の詩風を概括的に論評した。このスタイルは、後世の宋代の〈詩話〉に継承された。
2. 唐・殷璠の『河岳英靈集』は、盛唐の詩人を批評するにあたり、秀句を引用してそれを批評の中に融合させる手法をとり、その際、特に“奇”と“風骨”を重んじる。これは『詩品』の価値観を継承発展させたものと言える。
3. 唐・高仲武の『中興間氣集』は、中唐の詩人を批評するが、その評語は、『詩品』の用語を踏襲することが多く、“風雅”と“清新”という独自の批評基準によって詩人の評価を貫こうとしている。『詩品』の批評精神を継承していることは明白である。
4. 唐・皎然の『詩式』は、秀句を摘出して五つのランクを提示しており、その形式は、やはり『詩品』を継承したものと云える。
5. 唐・白居易は前半生では諷諭詩を称揚したが、後半生では、むしろ諷諭を離れて超俗の境地に流れている。これも『詩品』の方向に傾いていると言える。
6. 北宋・歐陽脩の『六一詩話』は、統一的な構想、作品選択の

基準、配列の原則もなく、単に話題となる詩人やその詩句を摘出し、それを中心に記述を進める。これは、詩作を巡る瑣事を詩評の中に挿入する『詩品』の手法を受け継いでいる。これが宋代以降の文学批評のスタイルとしての〈詩話〉として定着してゆく。

7. 南宋・張戒の『歲寒堂詩話』は、従来のエッセイ風の詩話と異なり、詩史全体を見渡す広い視野に立って漢魏以来、唐代に至る多数の詩人を批評しているが、その中で情景や心情の活写に優れる白居易を退け、言外の意を表現するのに長じた杜甫を“氣”の詩人として最高位に位置づける。これは“奇”、及びそれに連なる“氣”を重視する『詩品』の価値観を継承している。以上、著者は、『文心雕龍』『文選』『詩品』の成立と影響について、広い視野に立って深い分析を加え、独自の体系的な中国文学批評史を構築した。多くの著作を比較して、その間の異同を見出す洞察にすぐれ、日本の空海の『文鏡秘府論』、紀淑望の『古今集真名序』と『文心雕龍』の関係にも鋭い分析を加えている。その創見は、中国においても、翻訳を通して広く紹介され、きわめて高い評価を受けている。
- 以上のとおり、著者のこの研究は、日本学士院賞を授与するに十分に値する。